

## はじめに

「われわれは人類文明の大転換期を生きている！」

それは筆者が何年も前から、いろいろな場で言いつづけてきたことです。ことに二〇一一年三月に東日本大震災が発生してからは、訴える声に力が入りました。なぜならあの震災は「史上初の原発震災」とも呼ばれる通り、「人類は未来のエネルギーを何に求めたらよいか？」を、世界中に問い直させる契機になったからです。

大転換する人類文明とは、十八世紀の中頃にヨーロッパで生まれ、世界中に伝播していった、いわゆる「近代文明」を指しています。驚異的な生産力を誇るこの文明を基盤に据えた先進諸国は、飢餓や貧困の苦しみから解放されました。食べ物が乏しいという不安と苦痛は筆舌に尽くしがたいことを思えば、この文明の威力は絶大です。

しかしながら他方、近代文明は地球の資源を収奪し、自然環境の深刻な汚染と破壊

を招きました。あるいは自己中心のエゴイズムをかき立てる個人主義を蔓延させ、コントロールが困難な金融資本主義を生み出しました。そして科学技術の驚異的な発展が、ひとつ間違えば人類滅亡の危機を招きかねない不安を増大させました。

そうした負の面を打開していく営みが、おのずと近代文明の大転換をもたらすことになり、そうなっていかなばなりません。

近代文明の大転換を訴える人は、今までも大勢いました。たとえば「マネジメントの神様」と呼ばれ、二十世紀を代表する賢人とも称えられたピーター・ドラッカー（一九〇九―二〇〇五）は、一九九三年の著書『ポスト資本主義社会』の序章にはつきりとこう書いています。

われわれがこの転換期にあることは明らかである。もしこれまでの歴史どおりに動くならば、この転換は二〇一〇年ないし二〇二〇年まで続く。しかもこの転換は、すでに世界の社会、政治、経済、倫理の様相を大きく変えた。一九九〇年に生まれた者が成人に達する頃には、父母の生まれた世界は想像すらできないも

のになっているはずである。

\*

東日本大震災以来、世界も日本も激しく動き、変わってきました。あの日、人類文明の大転換の扉が、一気に開いたのではないかとすら思えます。日本の場合を少しだけ振り返ってみましょう。

二〇一二年の夏が終わると、日本の政界で奇跡的な出来事が二度も起きました。最初は、九月の自民党総裁選で、安倍晋三氏がまさかの逆転勝利をおさめたことです。その三カ月後に、年を越すと思われていた衆議院の「近いうち解散」が、突如として年内に実現し、ふたたび政権交代となって、第二次安倍内閣が誕生しました。それにより、大震災後の重苦しかった日本の空気が、一変したのは確かです。

二〇一三年には日本を代表する伊勢と出雲の神社で、壮大な「遷宮」の儀が挙行されました。伊勢の神宮は二十年に一度、出雲大社は六十年に一度の大祭ですが、かつてはいろいろな事情から数年遅れることがありました。日本の名だたる神社で、表と

裏の関係にある伊勢と出雲の遷宮が同期したのは、二〇一三年を含めて歴史上たった四度しかありません。調べてみたところ過去の三度とも、日本の社会が大きく変わっていく予兆であったように思われます。

そして二〇一四年になると、近未来の日本の人口が急減することを、広く国民が知るところとなりました。現状の出生率のまま推移すれば、約百年後には人口は四千三百万人ほどに減ってしまうのです。おのずと社会のあらゆる面で大きな変化が起ころざるをえません。そのための準備を、早急に手がけなければなりません。

そして、二〇一六年を迎えました。未来の歴史教科書に大書されるであろうと思うほど、世界でも日本でも「大事件」が起きた年です。何よりも驚いたのは、EU脱退をめぐる国民投票を実施したイギリスと、大統領選を迎えたアメリカで、国が二つに分断されたことでした。

イギリスといえば近代文明の発祥地であり、世界に先駆けて覇権国家を築いた国です。アメリカは近代文明の恩恵をもっとも受けて大発展した国。その両国が真つ二つ

に割れたのは、近代文明が大転換期にあることを見事に象徴していました。

あれから間違いなく、歴史の流れが変わりました。反グローバリゼーションや保護主義やナショナリズムの大きな潮流が起こると、一年前に誰が予想したでしょうか。その動きの尖兵が、なんとイギリスとアメリカだったのです。

日本国内にも大きな衝撃が走りました。天皇陛下が譲位のお気持ちを、国民に「おことば」として直接伝えられたからです。それは、明治以降の日本のタブーに触れた出来事ともいえるでしょう。幸いにして日本は国が分断されるには至りませんでした。しかし二〇一六年の出生数はついに百万人を割り込み、「ミリオンショック」の衝撃が日本列島を駆け抜けました。

\*

予期せぬ出来事が頻発するのが、大転換期の特徴です。何が起きても不思議ではありません。今まで隠されていたことや、タブーとされてきたことが、露わにもなるでしょう。そうした大転換期をたくましく生き抜くためには、各自がしなやかな強さを

養う必要があります。そのためにはまず、覚悟することが肝要です。あきらめの覚悟ではなく、この大変動の時代に生まれ合わせたことを「よかった」「有り難い」「面白い」「やりがいがある」……と、肯定的に受けとめ、励みとするのです。

実際に、そうではありませんか。先行きの見えない不安もたしかにありますが、大変動の時代にはチャンスがいくらでもころがっています。どんな状況にあらうと、運命を切りひらくのは自分自身にほかなりません。

肯定的な覚悟を定めたくえで取り組みたいのは、少しでも自分を磨き高めるための努力です。人は誰でも「よりよくなりたい」「よりよく生きたい」という本能的な願望を持っています。自らを磨き高めることによって、その願望は満たされることになります。

そして「人間」の文字が示しているように、人は他者と共にしか生きられません。その他者とは自分と関わる人だけでなく、物も自然も、自分をとりまく一切を含みます。そしてそこには自然界の法則と同様の、自分の心の持ち方を元にした、他者との関わり合いの法則が存しています。

筆者の属する一般社団法人倫理研究所では、その法則を「純粹倫理」と名づけ、諸事業諸活動の基軸にしてきました。それをよりどころ、あるいは道しるべとして、自己を磨き高める実践に取り組めば、豊かで実りある幸福な人生を創造できます。

そのためのヒントにしていたきたく、筆者は倫理研究所が発行している月刊誌『新世』に毎月の巻頭言（「新世言」）を載せてきました。以下に三十三の話としてお伝えするのは、ここ数年間の「新世言」の中から一部を除き、配列を整え、内容にも若干の補正を加えたものです（二つの記事を一つにまとめ直したものもあります）。大きく括れば、前半の第十四話までは「社会篇」、それ以降は「自己修養篇」となりましょうか。何か一つ二つでも、お読みいただいた方々の琴線に触れ、ご自身を高めるための一助になる内容があれば、著者として喜びに堪えません。

平成三十年一月

著者

はじめに ..... 1

第一話	日本の今そこにある危機	12
第二話	「性の神聖」に根ざす教育を	17
第三話	「倫理大国」を目指そう	22
第四話	過ぎたるはなお及ばざるがごとし	27
第五話	安心のための「三つの備え」	32
第六話	自分にできることは何か	37
第七話	易不易と憲法	42
第八話	「機心」が人を惑わす	47
第九話	究極の思いやり	52
第十話	人の喜びをわが喜びに	57



第十一話	食卓から伝える和の心	62
第十二話	介護で親子関係を築き直す	67
第十三話	見直したい「婚姻の意義」	72
第十四話	教育は家庭からはじまる	77
第十五話	自助努力の精神を呼び戻す	90
第十六話	思考停止から抜け出そう	95
第十七話	三匹の「タイ」を育てる	100
第十八話	人間はバカなのか	105
第十九話	「見えないつながり」を観る	110
第二十話	無難と苦難はひとつながり	115
第二十一話	秘められている心の力	120
第二十二話	壁は隔て、そして繋ぐ	125
第二十三話	「常識」と思い込み	130
第二十四話	「健康力」の向上	135

第二十五話	「身になる」能力を高める	140
第二十六話	禍を福に転じる	145
第二十七話	死は生なり	150
第二十八話	違和感を成長の糧に	155
第二十九話	出直しはできる	160
第三十話	「生きる知恵」を磨こう	165
第三十一話	徳の貯蓄	170
第三十二話	しなやかな頑張り	175
第三十三話	未知との遭遇が人生を彩る	180
おわりに		188